新約聖書 ルカによる福音書 21 章 25 節―36 節（新共同訳）

[25]「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。[26]人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。[27]そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。[28]このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」

[29]それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。[30]葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。[31]それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。[32]はっきり言っておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。[33]天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

[34]「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に罠のようにあなたがたを襲うことになる。[35]その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。[36]しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「終わり、はじまる」

海や太陽は、詩人にとって「永遠」の象徴でした。天才詩人と言われるアルチュール・ランボーの詩にも、このようなものがあります。

「見つけたよ／何を？／永遠を／太陽を溶かしこんだ海だ」。

悠久の時を感じさせられる素晴らしい詩です。

しかしながら本日の福音書では、終末の時、そのような永遠の象徴である海や太陽などにも かつてない異変があらわれることが、イエスを通して告げられます。

「太陽と月と星に徴（しるし）が現れる」といった天体の異変は、旧約聖書にも記されています。ヨエル書にはこうあります。「主の日、大いなる恐るべき日が来る前に／太陽は闇に、月は血に変わる。／しかし、主の御名を呼ぶ者は

皆、救われる」（ヨエル 3:4-5）。

世の終わりは、一面では破滅と滅亡をあらわします。しかし同時に、終わりは救いの完成の時であり、神が私たちの前に立たれる時でもあることを、聖書は語ります。

天変地異が起こり、全宇宙が揺り動かされる恐ろしさは、人間の経験する最も大きく衝撃的なものでしょう。しかしイエスは、その時、雲に乗り、神から与えられた大いなる力と栄光とをもって、再び来ると約束します。だからこそ、どのようなことが起こっても、私たちは身を起こし頭を高く上げて、天を見上げねばならないのです。

人間にとって、不安や恐れの時である終末が、実は「解放の時の到来」であるとイエスは告げます。「解放」とは、「あがないのわざ」と同じ言葉であり、ここでは完全な救いの実現を表す言葉です。

イエスはそれに続いて「いちじくの木」のたとえを語ります。いちじくの木はパレスチナ地方では日常的に馴染みのある木であり、イエスのたとえ話の中でも度々用いられています。

いちじくの木は、周囲がまだ冬の様相をしている時に小さな若芽を出し始める木で、目に見えないところで確実に季節の移り変わりを示す木として知られています。イエスが世の終わり —— 終末について語るたとえで、その若芽を出すいちじくの木が用いられているのは、さまざまな苦難の中であっても確実に神の救いは近づいてきて、「キリストの到来」が訪れることが表されています。

イエスは、こう言いました。「はっきり言っておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない」（ルカ 21:32）。

「この時代」とは何でしょうか。新約聖書の中での、「この時代」や「今の時代」という言葉は、その多くが否定的な意味で用いられています。つまり「この時代」という言葉が指し示しているのは、人間の自己中心的な傲慢さと不信に満ち溢れ、滅びに至るようなこの世であり、誠実な者、良心のある者、義なる者が圧迫され苦難に直面していくような世の中です。しかし、その中でこそ「神の救いの到来」が起こることが告げられているのです。

「この時代」がたとえどんなに不条理で嘆かわしい様相を呈していようとも、あるいはいつまでもそれが続くように見えても、「神の救いの到来」によってそれは終わる。それどころか、人が、生活や人生の基盤としている天地そのも

のが滅びると、イエスは示唆します。

そして、イエスはこう言います。

「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」（ルカ 21:33）。

イエスは、天と地の一切の世界を超えて、決して滅びることのない創造神である神に私たちの目を向けさせます。

旧約聖書のイザヤ書に記されている言葉が思い起こされます。「草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」（イザヤ 40:8）。

私たち人間の命、人間の営み、この世のすべては流れ消えゆく中、神の言葉は永遠に立つのです。

早いもので、今年最後の月の 12 月となりました。

フランスの修道女であるリジューのテレーズの言葉でこのようなものがあります。

「苦しむことなく、たくさん苦しむことなく、愛することができると思ってはいけません。わたしたちには、あわれな本性があるのです。それは無意味に存在しているのではありません」。

ここでの「愛すること」というのは、「人を救うこと」でもあるのだと思います。「苦しんだ者だけが、人を救うことができる」のです。

人生において、私たち人間は、多くの心の痛みや苦しみを味わうことがあるでしょう。しかし、その苦しみは、決して無駄にはならないのです。

世界の終わりの終末は、人類史上まだ誰も経験していませんが、個人の死である終わりは、すべての人間が経験することです。自分自身が死ぬことも、その人間にとって「世の終わり」「終末」と言えるのではないでしょうか。

イエスは「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」と言いました（ルカ 21:33）。

一人の人間は、枯れゆく草のようでありながら、同時に天と地であり、この宇宙のすべてなのです。

もうすぐクリスマスがやってきます。イエス・キリストの生誕の時であるクリスマスを、私たちは希望と喜びをもって待ち望みましょう。

お祈りをします。
神様、私たちが希望と喜びをもって日々を歩んでいけるようにお導きください。私たちが、隣人をゆるし、自分自身をゆるしながら、あなたを賛美して生きていくことができますように。主イエス・キリストの御名によって。アーメン

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第１朗読と第２朗読）です。

旧約聖書 エレミヤ書 33 章 14 節―16 節（新共同訳）

[14] 見よ、わたしが、イスラエルの家とユダの家に恵みの約束を果たす日が来
る、と主は言われる。[15] その日、その時、わたしはダビデのために正義の若枝
を生え出でさせる。彼は公平と正義をもってこの国を治める。[16] その日には、
ユダは救われ、エルサレムは安らかに人の住まう都となる。その名は、『主は
我らの救い』と呼ばれるであろう。

新約聖書 テサロニケの信徒への手紙 一 3 章 9 節―13 節（新共同訳）

[9] わたしたちは、神の御前で、あなたがたのことで喜びにあふれています。
この大きな喜びに対して、どのような感謝を神にささげたらよいでしょうか。
[10] 顔を合わせて、あなたがたの信仰に必要なものを補いたいと、夜も昼も切に
祈っています。
[11] どうか、わたしたちの父である神御自身とわたしたちの主イエスとが、わ
たしたちにそちらへ行く道を開いてくださいますように。[12] どうか、主があな
たがたを、お互いの愛とすべての人への愛とで、豊かに満ちあふれさせてく
ださいますように、わたしたちがあなたがたを愛しているように。[13] そして、
わたしたちの主イエスが、御自身に属するすべての聖なる者たちと共に来ら
れるとき、あなたがたの心を強め、わたしたちの父である神の御前で、聖な
る、非のうちどころのない者としてくださるように、アーメン。

教会讃美歌　294 番「恵みふかき」1,2,3 節、298 番「心まよいゆくを」1,2,3 節、328 番「主イェスにしたがう」1,2,3 節、256 番「すがたは見えねど」1,2,4 節、337 番「やすかれ わがこころよ」1,2,3 節